

貧書生

内田魯庵

青空文庫

「やい亀井、何しおる？ 何ぢや、懸賞小説ぢや——ふツふツ、」

と宛も馬鹿にしたやうに冷笑^{せうらわら}つたはズングリと肥つた二十四

五の鬚^{ひげしや}々の書生で、垢染みて膩^{あぶらびか}光りのする綿の喰出した襷^ど

袍^{てらくる}に纏まつてゴロリと肱枕をしつゝ、板のやうな掛蒲団を袷^{あはせ}の上

に被^{かぶ}つて禿^{ちびふで}筆を噛みつゝ原稿紙^{むか}に對ふ日に焼けて銅色^{あかぐね}をしたる

頬^{やつ}の瘦れて顴^{くわんこつ}骨の高く現れた神経質らしい全^{おな}じ年輩^{としごろ}の男を

冷やかに見て、「汝^{きさま}も懸賞小説なんぞと吝^{けち}な所為^{まね}をするない。三

文小説家になつて奈何^{どう}する氣ぢや。」

「先^まア黙つてろよ。」と亀井と呼ばれた男は顧^{ふりかへ}盼^{かん}つて較^やや得意

らしき微笑を浮べつ、「之でも懸賞小説の方ぢやア亀之屋万年と

云つて鑑定証きはめふだの付いた新進作家だ。今度当選あたつたら君が一夜の愉快費位は寄附する。」

「はッはッ、減らず口を叩きくさる。汝の懸賞小説も久しいもんぢや。一度当選つたといふ事ぢやが、俺と交際つきあつてからは猶まだ当選らんど。第一小説が上手になつたら奈何するのぢや。文士ぢやの詩人ぢやの大家ぢやの云ふが女の生れ損ひぢや、幫たいこもち間の成り損ひぢや、芸人の出来損ひぢや。苟くも氣骨のある丈夫をとこの風上に置くもんぢやないぞ。汝も尚まだ隠居して腐つて了ふ齡ぢやなし。王侯将相何ぞ種しゆあらんや。平民から一躍して大臣の印綬を握つかむ事の出来る今日ぢやぞ。なア亀井、筆なんぞは折つペシツて焼いて了へ。恋ぢやの人情ぢやのと腐つた女郎の言草は止めて了つて、

平凡小説を捻くる間に少と政治運動をやつて見い。」

「はッはッ、僕は太に君と説が異う。君は小説を能く知らんから一と口に戯作と言消して了うが、小説は科学と共に併行して人生の運命を……」

「措いて呉れ、措いて呉れ、小説の講釈は聞飽きた、」と肱枕の書生は大欠伸をしつゝ上目で昵と瞻めつ、「第一、汝、美が如何ぢやの人生が如何ぢやのと墮落坊主の説教染みた事を言ひくさるが一向銭にならんぢやないか？」

「今度は当選る、」と懸賞小説家は得意な微笑を口辺に湛へつ断乎たる語気で、「三月以来思想を鍊上げたのだから確に当選る。之が当選らぬといふ理由は無い……」

「汝は自慢ばかりしおるが一度も当選つた事は無いぞ。併し当選つた処で奈何する、一年に二度や三度、十円や十五円の懸賞小説が取れたツて飯は食へんぞ。」

「勿論僕は筆で飯を喰ふ考は無い。」

「筆で飯を喰ふ考は無い？　ふうむ、夫ぢやア汝は一生涯新聞配達をする氣か。跣足で号外を飛んで売つた処で一夜の豪遊の足に^{はだし}ならぬワ。」

「僕は豪遊なんぞしたくない。斯^かうして新聞配達をしながら傍ら^{かたは}文学を研究してゐるが、志す所は一生に一度不朽の大作を残したいのだ。飯^{めしくひ}喰^{たね}の種は新聞配達でも人力車夫でも立ちん坊でも何でも厭はないのだ。」

「吝^{けち}な野郎ぢやナ。一生に一度の大作を残して書^{しよ}籍^{じやく}館^{くわん}に御
 厄介を掛けて奈何する気ぢや。五体満足な男一匹が女や腰拔の所^ま
 為^ねをして筆屋の御奉公をして腐れ死をしてつては国家に対する
 義務が済むまい。なッ亀井。俺の忠告に従つて文学三昧も好い加
 減に止めにして政治運動をやつて見い。奈何ぢや、牛飼君の許^{とこ}か
 ら大に我々有為の青年の士を養うと云ふて遣^{よこ}したが、汝、行つて
 見る気は無いか。牛飼君は士を待^{たい}するの道を知りおる。殊に今度
 の次の内閣には國務大臣にならるゝ筈ぢやから牛飼君の客^{かく}となる
 は將に大いに驥^{きそく}足を伸ぶべき道ぢや。」

「僕は政治家は嫌ひぢや。」

「なにッ、政治家は嫌ひぢや、」と呆れたやうに眼を睜^{みは}つて、

「汝は能く／＼な腰抜けぢやナ。天下の権を握つて四海に号令するは男子の大愉快ぢやないか……」

「それはナ天下の権を握つたら愉快だらうが、」と懸賞小説家はながしめ流盼に冷笑しつ。「君等きみたちのやうな壮士の仲間入りは感服しないナ。」

「何ぢや、失敬な事吐ぬかす、」と肱枕君は勃むつくと起直りて故わざとらしく拳を固め、「伊勢武熊は壮士の腐つたのぢやないぞ。青年団体の牛耳を握りおる当今の国士ぢや、」と言掛けたが俄に張合抜けたやうに拳を緩めて、「そぢやが汝のやうな腰抜には我々燕趙えんて悲歌うひかの士の心事が解りおるまい。斯うして汝等と同じ安泊やすどまりにくす煤すすぶりおるが、伊勢武熊は牛飼君の股肱ここうぢやぞ。牛飼君が内閣を

組織した暁は伊勢武熊も一足飛に青雲に攀ぢて駟馬しばむちうに鞭むちうつ事が出来る身ぢや。白はくりゆう 竜ぎよふく 魚服すれば予且よしよに苦めらる。暫らく、志を得ないで汝のやうな小説家志願の新聞配達と膝組ひざぐみで交際ひおるが……」

「ふツふツふツ。」

「何笑ひおる、」と伊勢武熊は真摯まじめに力味返りきみつて、「功名咄こうみやばなしをするやうぢやがナ、此このぜん前牛飼君が内閣の椅子を占められた時、警部長の内命を受けたが、大丈夫あに豈田舎侍を甘んぜんや。己おれは首を掉ふつて受けなかつた。牛飼君も大いに心配してナ、それから警保局長ならと略ほぼ相談が纏まとまつた処が、内閣は俄然瓦解しおつた……」

「^{おや}呀くッ！」

「機一髪を仕損じたが、区々たる俗吏は丈夫の望む処で無い。官を棄つる事弊履の如しで……」

「尚だ官に就かんのぢやないか。」

「能く交^まぜ返す奴ぢや。小説家志願だけに口の減らぬ男ぢやナ。併し汝が瘠^う肱を張つて力んでも小説家ぢやア銭が儲からんぞ。」

「政治家でも銭が儲からんぞ。」

「馬鹿を云へ。衆議院議員は追^{おっ}付け歳費三千円になる、大臣の年俸は一万二千円になる筈ぢや。」

「其時は小説の原稿料が一部一万円位になる。」

「懸賞小説は矢張十円ぢやらう。」

「壮士の日当は一円だ。」

「はッはッはッ、新聞配達が何云ひくさる……」

「ごろつき壮士が……」

「何ぢやと……。」

と鉄拳將に飛ばんとする時、隅の方にうづくと抱かひまき巻がムクくと持上つて、面長な薄髯の生へた愛嬌のある顔が大欠伸をした。

「両君、相変らず詰らない喧嘩をしますナ……」

と伸のびをした手で腕さすを撫りながら、「銭が儲かるの儲からんのと政治家や文学者を気取る先生方が俗な事おつを仰しやる。銭が儲けたい

なら僕の所為まねをし給へ。君達は理窟を云ふが失敬ながら猶だ社会

を知つておらんやうだ。先ア僕の説を聞給へ。斯う見えて僕は故く

郷に在^あた時分は秀才と云はれて度々新聞雑誌に投書をして褒美を貰つた事もある。四五年前の雑誌を見給へ、駿州有^{うどごほり}渡郡田子の浦在^{ざい}駿河不二郎の名がチヨク／＼見えるよ。それだから故郷を出る時は矢張^{やつぱり}人並に学若し成らずんば死すとも帰らずと力んだが、さア東京へ来て見ると迎^{とて}も満足な学費が無くては碌な学問は出来ない。新聞や牛乳の配達をして相間^{あひま}に勉強しやうてのは、（亀井君は現にやつておるが）、実は中々忙がしくて、片手間の勉強で成効しやうてのは百年黄河の澄むを待^{まつ}やうなもんだ。所で僕は発^ほ身^{つしん}して商^{あきんど}人と宗旨を換え、初めは資本^{もとで}が無いから河渚^{かすい}ひの足に傭はれた事もある。点灯会社に住込んで脚^{きやたつ}達^{かつい}を担で飛んだ事もある、一杯五厘のアイスクリームを売つた事もある。西瓜の

切売をした事もある、とゞの結局つまりが縁日商人となつて九星独判きうせいひとりんだん

断んだん、英語独稽古から初めて此頃では瞞ま着やかしの化粧品と小間物を

売つてマゴあぶくくしておるが君、金を儲けるのは商人だよ。殊に縁

日商人位泡沫あぶく銭の儲かる者は無い。僅か二両か三両の資本もとで十両

位浮く事がある。尤も雨降のアブレもある。品物のロウズも出る

から儲かるほどに金は残らんが、なにしろ独立の商人でお客様の

外は頭を下げずに太平樂を云つて、定きまつた給金と違つて不意の所ま

得うけの入る処が面白い。君だから内幕を話すが二銭に三箇みつの石鹼シヤボン

ナ。あれは一百いっそく一貫の品だ。一と晩に一百売ると五貫余儲かる、

夏向になると二百や三百は瞬く間に売れる。一番高い六銭の石鹼

ナ、あれは一グロス二両と四貫だ。あの品が駄裁おつが妙に出来てる

んで素人しろうとが惚込んで三ダースや四ダースは直ぐ売れる。それから齒磨ナ、あれはココリゆうなうに傍点ちつになつてゐる齒磨を升ますで買つて来て竜腦りゆうなうを些ちつとばかり交せて箱詰にして一と晩置くとプンと好い香がする、そいつをオンタケ散とか豚印とか好い加減な名を付けた袋へ入れて一と袋一錢五厘に売るんだ。奈何だい、商人の樂屋は驚いたもんだらう。尤も僕の商売は夏向で冬は閑な方だが、こゝ君達に一つ秘策よつぽどを授けやうかナ。懸賞小説を書いたり政治家の尻馬に乗るより余程よつぽど氣楽に儲けることが出来る。斯ういふ商売だ。牛込や神田には向かんが本所、下谷、小石川の場末、千住ちゆう、板橋辺あたで滅法売れる、胼ひざあかぎれ霜傷しもやけの妙藥鶴の脂、臘おつとせいの脂、此奴こいつが馬鹿に儲かるんだ。なアに鶴や臘腦臍おつが滅多

に取れるものか。豚の脂や仙^{まぐら}台^{あぶら}鮪^みの脂肪肉で好いのだ。脂でさへ
 あれば胼あかぎれには確に効く。此奴を一^ひ貝^{とかひ}一錢に売るんだが
 二貫か三貫か資本^{もと}で一晩二両三両の商^{あきなひ}売になる。詐偽も糞もあ
 るもんか。商人は儲けさへすりやア些と位人に迷惑を掛けても関^{かま}
 はんのだ。今の^{あほあたまかぶ}大頭株を見給へ、紳商面をして澄ましてやが
 るが、成^{なりたち}立^{みんな}は悉皆僕等と全じ事だ。今でも猶だ其根性が失せな
 いから大きな詐偽や賭博^{ばくち}の欺^{いかさま}瞞をやつて実業家だと仰しやいま
 すワ……」と滔^{たうく}々と縁日の口上口調で饒^{しやべ}舌り立てる大氣焰に政
 治家君も文学者君も呆^{あつけ}氣に取られて眼ばかりパチクリさせてゐた。
 処へ案内もなく障子をガラリと開けて、方^{はうめん}面^{むせん}無髯の毬^{いがぐり}栗頭が
 ぬうツと顔を出した。

「やア、片岡、奈何じやい？」と政治家は第一に口を切つた。

「ふうむ、」と得意らしく小鼻を揺めかしながら毬栗頭は褪げチヨロケた黒木綿の紋付羽織をリウとしごいて無図と座つた。

「首尾よく落第かな？」

「勿論及第しおつた、」と毬栗君は大得意で有つた。

「君、及第しましたか？」と新聞配達の小説家は眼を睜つた。

「諸君、最^もう馬鹿にし給ふな、片岡禪吉は最早托鉢坊主ぢやないよ、明日辞令を請取^{うけと}れば台湾総督府の巡查片岡禪吉ぢや。大いに新領土の経営をして日本国家に報ゆる覚悟ぢや。」

「壮快々々。一番片岡君の為^ため祝宴を開いて万^{まんざい}歳を称へやう、」
と伊勢武熊は傲然として命令するやうに、「そこで会場は横町の

牛店として駿河君は実業家ぢやから会費の半分を負担し、亀井君は懸賞小説が当選るさうぢやから登用人材の片岡君と共に残る半額を負担すべし。処で俺は当分志を得んから諸君の御馳走になるのぢや。あッはッはッ……。」

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆85 貧」作品社

1989（平成元）年11月25日第1刷発行

1991（平成3）年9月1日第3刷発行

底本の親本：「社会・百面相」岩波文庫、岩波書店

1953（昭和28）年2月

入力：渡邊 つよし

校正：門田 裕志

2001年9月20日公開

2006年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

貧書生

内田魯庵

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>